
聖夜のバルド

界軌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜のバルド

【Nコード】

N6589P

【作者名】

界軌

【あらすじ】

クリスマスも間近なある夜、ルカが出会ったのは銀髪の青年。何故かその後には黒い子犬もてを拾って帰り、それがある騒動に繋がっていく。聖夜をテーマにした恋愛ものです。多分。

出会い（前書き）

クリスマスの企画ものです。

出会い

ある、冬の寒い日だった。

雪は降っていない。澄んだ黒い空には星が瞬いていた。

広大な敷地を持つ国立公園の一角に、その大図書館はあった。赤茶の煉瓦を重ねて作られた建物は中世の城の様に優美だ。

閉館時間の過ぎたその図書館の通用口から、ルカは出てきた。

近くの大学に通う彼女は、レポートを片付ける為に連日この図書館に通っていた。

肩まで伸ばした亜麻色の髪を上半分だけピンで留め、キャメル色のコートに身を包んだ彼女は階段を軽やかに駆け下りる。ずれた肩掛けバッグを戻して、空を振り仰いだ瞳は濃い緑色だ。

「すっかり遅くなっちゃった」

呟いて、ルカは雪が踏み固められた道を大通りに向かって歩きだした。

がさっ

すぐ傍の植え込みで物音がした。

「誰？」

いぶかしみながらもルカは近づいた。

それきり音は聞こえない。

気のせいだったかと思いつつも彼女は植え込みの裏側をのぞき込んだ。

そこは柔らかな雪の降り積もった広場になっていた。

ルカのすぐ足下に、銀色の髪の青年が仰向けに倒れていた。顔は、彼女からは見えない位置に向けられている。全身を覆う黒い外套を着ているが、冬用の厚手のものではない。いわゆるマントだろう。

その中も映画の中でしか見ないような白いシャツと三つ揃いのスー

ツだ。装飾は華麗で、胸元に差し込まれたレースのスカーフは繊細で高価そうな物だった。

一瞬唖然としたルカだったが、彼の頭の横に膝をついて、声を掛けた。

「ねえ、あなた。大丈夫？」

返事はない。

顔をのぞき込んで、彼女は驚いた。

「真っ青！」

ようやく半分だけ見えた彼の顔は青ざめ、体調が悪いことは確かだ。

まさか死体ではないかとルカは怯え、そっと青年の首筋に手を乗せる。規則正しい鼓動が感じられ、ほっと息をつくが、彼の体調が悪いのは事実だ。

「救急車を呼ばなくちゃ」

鞆から携帯電話を取り出した時、その手をがしりと捕まれた。

弾かれたように顔を上げたルカは、横たわったままこちらに視線を向けている青年を見た。

「そんなものを、呼ぶ必要はない」

彼は気だるそうに言う。

「でも、顔色が悪いわ。お医者さんに見てもらった方がいいと思う」ルカが言えば、青年は渋面を作り言い募る。

「不要だと、言って……」

その言葉が途中で切れた。

「あっ」

青年がそう言うと、ぽんつと音を立てて煙がたった。

「なにっ？」

ルカは驚いて声を上げた。

この煙は、物が燃えたときの煙と違って臭いも刺激も殆ど無い。

徐々に煙がはれていくうちに、ルカは自分の手を握っていたはずの青年の手が消えているのに気付いた。

次の瞬間には煙はすっかり無くなったが、同様に青年の姿もなかった。

「あ、れ？」

首を傾げるルカの目の前には、白い雪と黒い子犬がいた。

いや、極めて犬に近い生物だ。全身が黒い毛皮に覆われ、ダックスフンド程は長くない鼻筋。犬っぽくないのは、耳が狐程大きいことと、四足の爪がいやに鋭いこと、そして、耳の脇に羊のように捻れた角が生えているという点だった。

ただ、ルカに向かつて伸ばされている左の前足だけが先ほどの青年の名残を見せている。

「神様、これは一体どういうことでしょうか……？」

思わず天を仰いだ。

結局、ルカはこの黒い小さな生き物を抱えて家に帰った。

今は暖炉の前に揺り椅子を置いて座り、膝の上に黒い毛玉を置いて、二人で温まっていた。

クリスマスを目前に控えた街は明るく飾られていたが、寒さは一段と厳しくなり、厚着のルカもすっかり冷えてしまった。まして雪の上に転がっていたこの生き物はぶるぶると震えてさえたのだ。

両親も弟も帰ってこないまま、小一時間程が過ぎただろうか。寒気が引いたのか、膝の上の黒い生き物はすっかり弛緩して、小さな寝息を立てていた。

その背中を穏やかに撫でながら、ルカもとうとうと始めた。

その時、暖炉の薪が、ぱちんつと爆ぜた。

ルカの膝の上で黒い生き物が飛び起き、全身の毛を逆立てた。

「どうしたの、大丈夫？」

ルカが聞けば、首を巡らせたその生き物は、釣り目気味の瞳を大きく見開いた。

「そなた、先ほどの……」
喋った。

「羊犬つて話が出るの？」
両手でひょいと膝の上の生き物を持ち上げる。あっちに向けて、こっちに向けて、と方向を変えて眺めてみる。

「うわっ。よせっ回すな！」

そう言うのと、ルカの手の中で身を捻り、器用にそこから抜け出した。

床に降り立つや腰を浮かせたルカに言い放つ。

「私は羊犬ではない！魔界の男爵バルドフェルトだ！」

「バルドフェルト？魔界？」

ルカが聞き返せば、僅かに顎を反らす。

「そうだ」

聞き慣れない単語に目を瞬きながら、ルカは更に尋ねた。

「魔界つて事は、バルドフェルトは……」

「悪魔だ」

それを聞いてルカは思わず謝っていた。

「ごめんなさい」

心底申し訳なさそうに言う目の前の人間に、今度はバルドフェルトが目を瞬いて首を傾げた。

「何だ、一体。何故謝罪する？」

つつ、とルカの視線が暖炉の上に移動する。

バルドフェルトもそれを追って首を巡らせた。

「私のパパは、牧師なの」

「ぐ、うっ……」

ルカの視線の先には銀色の輝きを放つ十字架があった。

また、彼女の視線が動く。

多少ダメージを受けながらもバルドフェルトもそれに続く。

「それに、ママはとても敬虔な信者で……」

赤と緑のクリスマスの装飾の奥には、小さいが古く美しい木製の

祭壇がある。その上には、キリストを抱いたマリア像が安置されていた。

「……………」

何故今まで気付かなかったのか、とバルドフェルトは自問する。

「あの、それから……………」

「ま、まだあるのか？」

ルカは両手の指先を絡めて俯く。

「うちの裏には教会があるの」

もう呻くことも出来ずにバルドフェルトは膝を折った。

「ああ！……………大丈夫？」

すかさずルカが抱き上げると、彼は目を開いた。

「何故、ここまでの聖なる力に今まで気付かなかったのか……………」

「……………」

ぐったりとしたまま呟くバルドフェルトに、ルカもわからないと首を振る。

唐突に、廊下を駆けてくる足音が響いた。

「たっだいまー、ルカ！」

居間の扉を、ばーんという効果音付きで開いて、一人の少年が入ってきた。

ルカと同じ亜麻色の髪に、彼女より青の強い碧の瞳がきらきらと輝いている。

「お帰りなさい。セナ」

バルドフェルトを抱いたままルカが振り返ると、セナと呼ばれた少年はすぐにその黒い生き物に気がついた。

「犬を拾ったの？ルカ？」

「あ、えっと。犬って言うか……………」

ルカが言いよどむと、さっとその腕の中からバルドフェルトを取り上げた。

「わあ。耳が大きいね。それに、あれ、これって……………角？」

目敏く頭の異物を指摘する。

しかし、その間もルカと同じようになるとバルドフェルトを
回すものだから、彼はたまったものではない。

「よせ！回すな！」

「……………」

「ああ……………」

セナは目を極限まで開いて沈黙し、ルカは頬に手を添えて困った
顔をした。

「何てことだ。あれだよ、……………ジーザズ！！」

叫んだ途端、その表情は驚愕から歓喜へと塗り替えられた。

「何てことだ、神よ！まさか生きた悪魔に会えるなんて！感謝しま
す！！」

「悪魔に会えた事を神に感謝するなんて、馬鹿かお前」
思わずバルドフェルトは突っ込んでいた。

「というか、死んだ悪魔なら会ったことがあるのだろうか？」

「うわーうわー。獣型の悪魔かあ。黒い毛皮に羊の角。まさしく悪
魔のものだね。でも、なんでこんなに小さいんだろう？省エネタイ
プ？」

「最初に会ったときは人の姿をしていたわよ」

隣でルカが教えてやると、素早くその頬にキスをした。

「さすが、ルカ。普段の行いが良いからこんな幸運に巡り合っただ
ね！品行方正な姉を持つと得するなあ」

「姉？」

セナの両手で脇の下を持たれ、下半身をだらんとぶらつかされた

（ 良い子は真似しないでください。）バルドフェルトが呟いた。

「おや？もしかして、自己紹介ってまだ？」

「そういえば、そうね」

ルカが領けば、セナはバルドフェルトをルカに対面する形に持ち
上げた。

向かいあった形で、彼女はバルドフェルトの小さな前足を軽く握
った。

「私は、ルカ。そっちが弟のセナよ。よろしくね。えっと、バルドフェルト?」

あっさりと言乗るルカに、バルドフェルトは鼻先に皺を作って怪訝そうにする。

「人は、契約の為に己の名を秘匿ひかくするものじゃないのか?」

「ああ、それ? うん。そうしてる時代もあっただけだね、今はすっかり廃れすたちゃったよ」

セナが警戒に答える。

流行廃りの問題にしていいのかと、バルドフェルトは疑問に思うが、もう一つ気になることを尋ねた。

「そなたの名だが……」

「私の名前?」

ルカは自分を指して首を傾げる。

「そうだ、ル、ル……」

何度か言い直そうとするも、バルドフェルトは途中で言葉を切ってしまう。

「くそつ。力が抜けてしまう!」

悔しそうに吐き捨てる。

ルカには何のことだか判らなかったが、セナにはわかったらしい。

「ああ。ルカの名前は聖人から戴いたからだね。名前に聖なる力があるんだ。弱い魔力なら抜けてしまうよ」

「そうなの? 名前を呼べないなんて、困るわね……」

しばし考えるが、直ぐにいい考えが浮かんだ。

「そうだ。ルウって呼んでくれればいいわ」

「ルウ……?」

「ああ。言えた。良かった。子どもの頃の愛称なの」

「……では、私のこともバルド、と呼べばいい」

「バルド、ね。わかったわ」

ルカは小さく頷く。

「えーと、僕もそう呼んでいいのかな?」

セナが控えめに尋ねてくる。

「好きにすればいい」

バルドフェルト、バルドがそう言ってやると、セナは「やったや
った」と言いながら、腕を上下に振った。

必然的にバルドも上下に揺れる。

「よ、よせ。止める……！」

焦る彼を、ひよいと細い腕が攫い、腕の中に収めてくれた。

バルドが見上げると、ルカは微笑む。

その笑顔を見つめながら、バルドは自身の体に魔力が戻るのを感じた。

「な、なんだ……？」

「どうしたの？」

戸惑うバルドに、ルカは静かに尋ねてくる。

「そなたは、そなたは一体何者だ?!」

出会ってから

「何者か、と聞かれても……」
姉弟揃って、そう答えた。

「そうね、あえて言うなら」

「言うなら？」

ルカが顎に指を当てて言えば、セナが聞き返す。

「……普通の人」

「そんな訳があるか！」

思わずバルドは突っ込んでいた。

「普通の人間が悪魔の魔力を高めたりする訳が無い」

「じゃあ……あれだ。ルカの癒しパワーは悪魔にも効くんだ」

そう、昔からルカが傍にいと子どもが泣きやんだり、気の荒い犬が大人しく眠ったりという事があったのだ。それをセナは「癒しパワー」と呼んで、観察していたものだった。

「ううん。これは興味深い現象だなあ。悪魔って基本構造は人間と同じなのかもしれない！」

ぐっと拳を握りしめてセナは叫ぶ。

やたらとハイテンションな少年にバルドは少しうんざりし始めた。

「そなたらは変だ。何故こんなにあっさり私を受け入れる。ましてそなたらの親は神職につく者だというのに……」

ルカとセナは顔を見合わせると、頷きあった。

「じゃあ、ちよつと行こうか」

「直接見てもらった方がわかると思うし」

そう言って、セナが先頭に立って居間を出た。

階段を上り、二階の廊下の端へと進む。

セナは壁に掛かっていた細い鉤付きの棒を手に取ると、天井のフックに引っかけて梯子状の階段を降ろした。天井裏へ行くための階

段だ。

先に天井裏へ上ったセナを追って、バルドを片手で抱き直したルカも続く。

屋根裏部屋は真つ暗だったが、廊下からの明かりで足下がぼんやりと明るい。

セナは傍らの燭台にマツチで火をつけた。

三本の蠟燭に火が灯ると、セナはそれを掲げてバルドとルカを振り返った。

「ようこそ、僕とパパの研究室へ！」

それはそれは嬉しそうに言った。

その部屋は、怪しかった。壁中に本棚があり、そこに並べられた本の大半は魔術書だ。暖炉の上からは様々な植物や動物の死骸らしきもの（カエルやイモリの干物か？）がぶらさがっている。黒い布が掛けられた丸テーブルの上には水晶玉やタロットカードが置かれている。

「なんだ、これは……」

呻くようにバルドは言った。

「うん。僕とパパはね、熱狂的なオカルトファンなんだ！」

「オ、オカルトファン？」

「そう。パパはその手のコミュニティでは『悪魔分類学の権威』と呼ばれているんだよ」

その手のコミュニティってなんだ、と突っ込むと話が長くなると感じたバルドは賢明にも口を閉ざした。

しかし、今度はセナから質問が飛ぶ。

「ねえ、バルド。君って召還されてきたの？まさかルカに、じゃないよね？」

「違う。私は誰にも召還されてはいない」

「じゃあ、君って実は位が高いのかな？爵位とか持ってる？」

「……本当によく知っているな」

バルドが呆れれば、ルカが言い添える。

「そう言えば、男爵を名乗っていたわね。ね？」

と、再び両手で抱いていたバルドに首を傾げる。

「そうだ。だが、今年中に爵位が変わる」

「えっなになに？どういうこと？」

セナが瞳を一層輝かせて聞いてくる。

「今回の試験が通れば、公爵に任じられる」

「こ、公爵？！すごい！魔界でも指折りの実力者ってことじゃないか！」

「よく聞け。これはおまえたち人間にとっても悪い話ではない」

それを聞いて、セナは少し真面目な顔をした。

「じゃあ、暖炉に火をつけよう。ちよつと寒いし。ルカとバルドはそこに座っていて」

そう言つて、暖炉脇のソファを指さした。

ルカは素直にそれに従い、ソファに腰を下ろして、バルドを膝に乗せた。

暖炉の薪に火をつけているセナの背中を横目に、バルドはルカの膝から降りた。

この短時間で、その動きが出来る程まで魔力が戻っていることに改めて驚いた。

ルカの視線が追ってくるのを意識しながらも、先程目にした肩掛けをくわえて戻る。

「まだここは涼しい。羽織るといい」

差し出された膝掛けを受け取つて羽織ると、ルカは嬉しくて微笑んだ。

「ありがとう。とっても紳士的なのね」

彼女の笑顔に、奇妙な居心地の悪さを感じながらも、バルドは「当然のことをしたまでだ」と返した。

「では、こちらへどうぞ」

ルカは自分の隣にバルドを誘う。

彼は小さく頷いて、ソファに飛び乗るとルカの隣に丸まった。

「よじつついたー！」

背後のやりとりなどまるで気にもしないセナは、ほくほく笑顔でルカの前の椅子に腰掛ける。

両手についた僅かな炭に気づくが、ズボンで拭ってしまった。

「で、で？バルドの話は？」

小さく嘆息して、バルドは顔を上げた。

「私が今度継ぐ予定のアルイプス公爵位には、ある役目がある。使命と言い換えてもいいだろう」

「どんな役目？」

「人の世に渡る悪魔共の監視と捕縛だ」

「えっ。監視はわかるとして、捕縛？しちゃうの？」

「契約に縛られたものに手を出すことは許されていない。それ以外の、自力であるいは偶然こちらに渡ってきた悪魔が主な捕縛対象となる」

「契約に縛られたつてことは、召還された悪魔とかかな？」

「そうだ。それから、大悪魔が使役する小者とかだな」

「へへ。へえへ。じゃあ、契約悪魔は野放し？」

「いや。それも制限がある。契約を超えた行為をした者は捕縛対象に切り替わる」

「はあ。魔界つてもっと、こう、なんていうの、好き放題？な感じだと思ってたよ」

頭を振ってバルドは言う。

「魔界は、お前たちが思うよりも余程秩序立った世界だ。そうではなくては数千年、数万年に及ぶ繁栄は有り得ない。人の世との共存とて難しいだろう」

「確かに！」

セナは納得して指を鳴らす。

「まるで、バルドは正義の味方ね」

くすくすと笑いながらルカは言った。

バルドは、「人間にとっても悪い話では無い」と言ったが、これ

では人間に優しすぎるだろう。

「勘違いをするな。秩序があるうとも、魔界は完全な実力主義だ。力の強い者が弱い者に優る。これが普遍的まさの法則なのだ」

冷徹なその声は、やはり人ならぬ力を帯び、ルカとセナの二の腕が粟立った。

先にその衝撃から立ち直ったのはセナだ。

「じゃあ、公爵になるための試験って、なに？」

「今年の聖夜に、捕縛の役目を担うのだ」

「……つまり、聖夜だけはバルドが悪い悪魔を捕まえるってこと？」

「そうだ。聖夜は悪魔の力が最も押さえられるからな。実力試しと言ったところだ」

「ノルマ何匹ーとかあるの？」

「それは特に無い。捕縛対象を過たあやまず、魔界の獄じごくに落とせばいい」

「へえー。でも、それじゃあ……」

「……そうだ。魔力が戻らなければ話にならん」

もの凄く厭そうにバルドは言った。

「そうか！」

立ち上がってセナは高らかに宣言した。

「バルド、君、今日と明日はびっちりルカと一緒にいなよ！幸いにも聖夜は明日だ。魔力はちゃんと戻るよ。奇跡が起きるはずだ！」

「悪魔が聖夜の奇跡を望んでどうする……」

理由

バルドの話が済んでも、まだ彼に質問をぶつけたかったセナは「あと一時間！」と粘ったが、バルドに一蹴され、渋々引き下がった。その後は、全く他にどうしようもなく、ルカとバルドは彼女の部屋で一緒にいた。

大図書館で書いていたレポートの仕上げをするルカの膝にバルドが丸まっている。

何か、飲んだり食べたりするかとルカは彼に聞いてみるが、「魔力さえあれば飲食は不要だ」と言われてしまった。

最後のページを書き上げて、ルカは全ページに目を通す。ぱらぱらとめくりながら誤字や脱字を探すが、これといって見あたらない。

「完成」

机の上でとんとんとまとめてクリップで留めた。

すっかり冷めてしまった紅茶を飲みながら、反対の手でバルドのつやつやした毛並みを撫でた。

一度目を開くが、撫でられる感触が気持ちいいのか、バルドは目を細めた。今にも喉がごろごろと鳴りそう。

「そう言えば、バルドはどうしてあんなところに倒れていたの？」
ルカの問いに首を持ち上げたバルドは、少し首を傾げる。

「あの大図書館の隣に古い塔があったらう」

「ああ、あの大きい塔ね」

「そうだ。あそこはこの辺りで最も淀んだよど空気があって、魔界からの道を開きやすかったんだ」

「昔、あの塔は罪人を閉じこめる牢の役割を果たしていたって、パパが言っていたわ」

「そなたらの父親は子どもになにを教えているんだ……」
呆れたような口調にルカがくすくす笑うと、バルドは少し身じろ

ぎをした。

「まあ、いい。ともかく、そういった負の感情に満ちた場所は魔界と繋がりやすいのだ。だが、塔から出た途端、魔力が急激に奪われた。飲食を必要としない分、私達悪魔は魔力に頼っている部分が大きい。そのために身動きがとれなくなっただんだ」

「あの大図書館は元々旧王家の礼拝堂がだったの」

「礼拝堂だと？だが、聖域の証などどこにも無かったが……」

「増改築が進んでね。もう、原形はどこにも無いってセナが調べていたわ」

「おかしなことを調べるな、あの者は」

「うん。『オカルトを知るなら、その対極に位置するものも知るべし!』とかつて言ってたけど……。そういうことかな？」

「そういうことなんだろうな」

嘆息混じりにバルドは言った。

十二時も近くなった頃、玄関先がにわかに騒がしくなった。

「パパとママが帰ってきたみたい」

顔を上げたルカが言う。

「バルドも挨拶しておく？」

いたずらっぽく聞くと、ふさふさと長い尻尾を一振りして、バルドはルカの膝から降りた。

「やめておこう。これ以上魔力を失う訳にはいかないからな」

ちなみに、ルカの部屋の聖なる力を秘めたもの（例えばマリア像のカメオとか）は、セナの監修の下、既に撤去されていた。

バルドは、部屋の隅に置いてあった一人掛けのソファに飛び乗ると再び体を丸め、瞳を閉じてしまった。

「じゃあ、ちよっと思って行くね」

そう言っただけでルカは部屋を出て行った。

バルドは薄目を開き、階下から聞こえる音を拾う。

「おかえりなさい」

「ただいま、ルカ、セナ」

「明日の準備は終わり？」

「そうだね。また、聖誕祭のお芝居の時なんか手伝ってもらおう」となると思うけど」

「毎年のことだわ。気にしないで」

「ありがとう」

「そうだ。パパ、ママ。私、犬を拾ったの」

「黒い毛並みの子犬だよ！」

「飼いたいの？」

「ううん。帰るところはあるの、帰れるようになるまで預かるだけよ。駄目？」

「ちゃんと世話するなら構わないさ。会わせてもらえるのかい？」

「それは……………」

「凄い人見知りなんだ！ルカ以外には触らせもしないんだよ！」

「おや。残念だ」

どうやら、ルカとセナの姉弟は両親にバルドのことを隠し通す気だ。それを確認したバルドは、眠りに近い休息状態に入った。

聖夜（前書き）

少し残酷な表現を含みます。
苦手な方はご注意ください。

聖夜

翌朝、一家は起き出すとすぐに教会と家とで作業を分担した。

もちろん、ルカは母親と一緒に家の作業担当だ。

角と爪を隠したバルドは、普通の犬の振りをして常にルカの傍らに陣取っていた。

昨晩は避けたルカの母親にも会わざるを得なかった。彼女の顔立ちは娘であるルカと良く似ていたし、動物好きも同じらしく、バルドを抱き上げたがった。しかし、首から下がった十字架に青ざめたバルドはすぐにルカの背後に隠れてしまった。

「本当にルカにしか懐かないのね……」

残念そうにそう言った。

その様はおつとりと優しげだったが、その後バルドはすぐにこの人物に恐怖に近い畏怖の念を抱いた。彼女はなんと、事ある毎に聖句を唱えたり、十字を切ったりするのだ。

その度に僅かだがバルドの魔力は削られた。それに気付いたルカは、なるべく母親から距離をとるしかなかった。

「ごめんね、バルド。よくわからないけれど、少しは魔力が貯まってきたのでしょう？」

「まあ、そうだな。まだ人型を取れるほどではないが」

「やっぱり人の姿をしている方がいいの？」

「獣の口ではあまり複雑な呪文を口にできない。それでは対処方法が少ないからな」

「そう。夜までには何とかかなりそう？」

「ぎりぎりだな。すまないが、このままあまり母親と接触しないでもらえる助かる」

申し訳ないのと、情けないので、バルドはルカから顔を逸らして言った。

その様子が可愛くて、ルカは視線があう高さまでバルドを抱き上

げて微笑んだ。

「困った時は、お互い様。ね？助け合わなくっちゃ」

「それがお前の親の教えか？」

くしゃりと鼻先に皺を刻んでバルドは苦笑した。

「そうね。それに、バルドは正義の味方みたいなものだし」

「悪魔に正義を求めるとは、いい度胸だ。魔力が戻ったら覚えていろよ」

遊び心を含ませてルカが言えば、バルドも楽しそうに返した。

一人と一匹は、思わず笑いあっていた。

夕刻になると、火を灯した蝋燭を掲げ持った信者達がぼつりぼつりと教会集まってきた。

家の窓からその光景を見ていたルカは、膝の上のバルドの背を撫でた。

「そろそろミサが始まるわ。移動しましょう」

ミサが始まれば、家の中においても聖歌が漏れ聞こえたり、祈りの力がバルドに影響を及ぼすということで、少し家を離れようと話していたのだ。

コートに身を包み、ルカは小さな鞆を斜め掛けにした。

居間のテーブルの上には、「近所の林に、ヒイラギをとりにつてきます」とメモを残した。

今頃セナが大量のヒイラギを教会の地下室に隠しているだろう。

不足したヒイラギをルカが取りに行ったという設定だった。

「これで本当に大丈夫か？夜に娘が一人で出掛けると気にするのではないか？」

「ふふ。この街で危ないものなんて天候の悪化くらいなものよ」

気遣わしげなバルドに、ルカは軽く笑い声を上げた。

「それに、ちゃんと騎士^{ナイト}がついてくるって書いたもの」

「騎士って、私のことか？」

「もちろん」

そう言って、ルカはバルドを抱き上げ、家を出た。十分も歩けば、目的の林だ。

「ヤドリギはもう少し奥に行かないとないのよね」

ルカは片手に持ったオイルランプの明かりで周囲を照らす。つかず離れずの位置を保ってバルドがその横に続いていた。

更に十分ほど歩けば、林の脇に立つ家々も遠くなり、まばらに見える木の隙間から明かりが見える程度になった。

「ミサは何時ごろ終わるんだ？」

バルドが聞くと、ルカは手袋をした手で口元に触れた。

「そうね。八時くらいかしら？家族で団欒だんらんの時間をもって貰いたいからって、パパはあまり遅くまではやらないの」

「……それまで外にいる気か？体が冷えてしまう」

「バルドは、本当に気遣いさんね。でも大丈夫。もう少し行ったらここに秘密基地があるのよ。そこなら……」

ルカの話の途中で、バルドの様子が変わった。

今歩いてきた方角を向いて、毛を逆立てる。耳がぴんと立ち、警戒のポーズだ。

「……バルド？」

「悪魔が召還された。だが、契約は不履行になったな。こちらに向かってくる!!」

彼が叫ぶや、凄まじい風が、ルカとバルドを襲った。

「きゃあっ」

よろけたルカはその場に尻餅をついてしまった。

バルドは彼女の目の前に移動し、守るように背中を向けて立ち塞がる。

その口からは低い唸り声が吐き出されている。

はっとルカは目の前を見た。

そこには、二体の異形がいた。一体は額に三つの角を持つ灰色の巨大な狼だ。もう一体は扇情的な黒いドレスを纏った女性だ。彼女

の額には縦に裂けたようになって、その隙間からぎよるぎよると動く瞳が覗いていた。狼の背に寄せられた手の指は長く鋭い鉤爪になっている。

「あつはあ。やっぱり。妾^{わらわ}たちを召還した者より、こちらの娘の方が余程美味しそう……」

女は流し目をルカに送りながら、真つ赤な唇から舌を差し出した。ゆっくり自分の唇を辿る。

「元来た道に至り、魔界へと戻れ！」

低く、バルドが叫ぶと、女は目を細めた。

「なあに、このちっちゃい悪魔」

「大した力も無いくせに喚^{わめ}くな。それとも、その娘はお前のものだとしても言う気か」

黙っていた灰色の狼が嘲^{あざわら}るように言う。

「黙れ！召還主に従わぬは、捕縛対象とみなされるぞ」

女と狼は顔を見合わせる。

「あつはあ！」

「何故我らが力無き者に従わねばならない？殺さなかっただけましと言えよう」

女は噴き出して笑い転げ、狼もまた口を裂くようにして笑った。

その邪悪な様子にルカの体に震えが走る。

これが、悪魔たちの本性なのだ。己を律することを知らず、欲望のままに振舞う。召還され、その主に従うのは基本的に己の力が叶わない時のみ。だから、これからバルドフェルトが継ぐアルイプス公爵の担う役割には大きな矛盾を孕^{はら}んでいるのだ。

しばし笑っていたかと思えば、女は突然豹変した。

「邪魔よ、子供。そこをおどき！妾はその娘を喰らいたいのだ」

額の瞳が極限まで見開かれ、血走った眼球が妖しい動きを繰り返す。

「ルウ、顔を上げるな」

バルドがルカに忠告する。その言葉にルカはさっと下を向いたが、

彼自身は女の瞳と睨み合っていた。

「……………おや。呪いが効かないなんて。そこそこ力があるのね」
面白くなさそうに女が言う。

「さっさとどけ。我らは腹が減っている」

灰色の狼が、女をその場に残して歩み寄って来る。

「それ以上近づくな！」

空を切るように鋭くバルドは言うが、灰色の狼はそれを鼻で笑った。

「はっ。ござかしいわ！」

ルカが気付けば、狼はすぐ目の前に居て、鼻先でバルドの小さな体を弾き飛ばしていた。

飛ばされたバルドの体は大木に当たって、雪の上に打ち伏せた。

「きゃあつ、バルド！」

慌てて駆け寄ろうとするルカの目の前に灰色の狼が立ち塞がる。

するりと、冷たい感触が首筋を辿る。

耳元で艶めいた声が出た。

「まああ。あのちっちゃい悪魔を心配するの？なんて心優しい、愚かな娘」

背後から三つの目を持つ女に抱きすくめられていた。

「あ、ああ……………」

本能的な恐怖がルカを支配する。小刻みに体は震え、それなのに、自分の意思では動いてくれない。

立ち膝をついた姿勢のルカの腹の辺りで鼻をひくつかせ、灰色の狼が言う。

「俺は内臓がいい。他は特に興味が無い。好きにしろ」

「あああ。本当お？……………どうしましょう。まよっちゃうわあ」

女の鉤爪がルカの右耳から顎を撫で付ける。今にも首の動脈を断ち切りそうな位置を何度も往復する。

恐怖にひきつる唇で、ルカは必死に呼んだ。

「バ、バルド……………バルド」

「いやあだ。呼んだってこないわよ。死んじゃったでしょ。あんなの」

「死なな、いわ。死んだり、しない」

繰り返すルカの唇に女の爪が当てられる。

「しいー。黙って。妾は、貴女の生气からもらうことにしたからね？」

そう言っつて、ルカの首を仰け反らせて彼女の上に屈みこむ。

ルカの目の前で女の真つ赤な唇がにんまりと歪む。そして、何かを吸い上げるように唇が窄められた。

その時、みしり、と何かが音を立てた。

「何だ？」

「あらあ、なあにい？」

灰色の狼と女が周囲を見回す。

ルカは、吸い寄せられるように、バルドが飛ばされた付近を見ていた。

その視線に気付いた悪魔たちもそちらへ視線を向けた。

そこには、白い煙が立ち込めていた。

広がった煙は、灰色の狼の足元まで迫っている。

「ルカに、触れるな」

若い、青年の声が響く。

すると、途端に煙が引いた。

皆の視線の先には、黒いマントを羽織った、銀髪の青年が立っていた。

凍てついた海のような薄蒼い両眼は、怒りに燃えている。

「バルド……」

安堵と喜びに満ちた声でルカは彼を呼んだ。

つ、と青年の視線が彼女に向く。待っている、そう言うように、一度瞬きをする。

「ま、まさかあ、貴方は……………」
女が震えた声で言う。

灰色の狼も、一歩後ずさる。

「お前達の行動は、召還主の契約の範囲内ではないだろう」
冷えた声が罪状を突きつける。

「我らは、弱き者に従うなど、そのようなこと……………」

「魔界ならいざ知らず、人の世でその道理を説くは愚か」

言い訳を口にする灰色の狼を、青年は一言で切り捨てる。

それを聞いて、視線をさ迷わせた女は、腕の中のル力を見た。

「妾たちを獄に繋ぐ前に、この娘の首が飛びますよう」

ル力の首に震える鉤爪を押し当てる。

その時には既に青年の口から低い詠唱が流れていた。

「開け、獄の門。約定を違えし者共をその鎖で縛れ！」

マントを翻し、腕を大きく横に振るう。

高らかな宣言と同時にル力と二匹の悪魔の背後に漆黒の門扉が出現し、軋んだ音をたてて開いた。

扉が開いた先には、底知れぬ闇がある。その奥から無数の鎖が飛び出して、灰色の狼と女の悪魔に絡みつく。

叫びながら鎖から逃れようともがく二匹の悪魔の間を縫い、青年はル力に手を伸ばした。いつの間にかル力から女は離れていたのだ。細く長い腕がル力の腰に回り、力強く抱き寄せた。

ほんの一步で黒い獣が飛ばされた木の辺りまで移動した。

「公！アルイプス公！どうかお慈悲を！」

女が叫んだ。体の殆どを鎖で覆われ、鎖の触れた部分からじゅうじゅうと皮膚の焼ける音と、煙が立ち上がっている。

「ああっ」

その凄惨な光景にルカは自分を抱く青年にしがみついて目を逸らした。

彼女を抱く手を少し強めて、女に懇願された青年は顔を上げる。「残念だったな。私はまだアルイプス公爵位を継いではいない。例え継いでいたとしても、お前達に与える慈悲は無い」

絶望と驚愕に顔を歪めた女の横で、灰色の狼はぐったりとしていた。こちらも同様に鎖に捲かれている。

「閉じる」

冷徹に言い放った瞬間、鎖の引きは強まり、彼らは扉の奥の闇に引き込まれた。そして、漆黒の扉は再び音を立てて閉じられた。

がしゃん、と錠の下りる音が響いた後、門扉は跡形も無く消え去った。

「ルカ」

自分にしがみ付いて震えるルカに、青年は悪魔達に向けるものは比べ物にならないほど優しい声を掛けた。

一つ深呼吸したルカは、ゆっくりと顔を上げた。

銀色の髪に縁取られた白皙はくせきの美貌がそこにあつた。しかし、薄青の瞳は黒い獣と同じものだ。

「……バルド？」

首を逸らして彼を見上げながら、ルカは尋ねた。

青年は、瞬きをしてルカの質問に肯定の意を示す。

「怖い、思いをさせてすまなかった」

眉間に少し皺を寄せて、バルドフェルトが言う。

ルカは軽く目を見開いて、首を振った。

「うっん。あつ、怖かったのは本当だけど、でも、バルドのせいじゃないでしょう?」

そう言って、笑う。

その笑顔を見たバルドも、ほっとしたように笑った。

ルカは、初めて見た人型のバルドの笑みに、胸が強い鼓動を打つ
のを感じた。

「あ、有難う。助けてくれて」

自分の変化に動揺しながらも、はにかむように謝辞を口にする。
頬を赤く染めたルカに、バルドは気付けば顔を寄せていた。

淡い赤色の唇と薄い少し乾いた唇が触れる。

「ルカ」

触れ合った唇が離れたとき、バルドは彼女の名を口にした。

「バルド、名前は魔力が……んっ」

魔力の心配を口にするルカの唇に再び触れる。

柔らかな暖かい感触が心地よかった。

「構わない。今は、そなたの名を呼びたい。……ルカ」

胸に湧き上がる想いをそのまま呼ぶ声に込める。

彼の唇を受け入れるルカも、喜びに心と体が震えた。

何度も、そつと触れてくる優しい感触が、離れる度に彼女の名を
呼ぶのだ。

ルカ、……ルカ、……ルカ

ルカは、恐怖とは違う感情のために上手く動かない腕を必死で動
かしてバルドの首に回した。

眦まなひりに浮かんだ涙をバルドの指が拭ってくれる。

ルカも、バルドフェルトも満ち足りた想いを分かち合っていた。

しかし、バルドの様子が変わる。

「あっ」

そう言つと、ぼんつと音がして煙が沸き立つ。

煙のせいで視界が失われたルカの腕に、馴染みの重みが掛かって
いた。

ほんのひと時で煙が立ち消えたとき、彼女の腕の中には黒い獣が納まっていた。

「……………バルド？」

「……………」
獣は、顔をくしゃくしゃにすると、バツが悪そうに視線を逸らした。

「聖夜に、魔力を使い過ぎた」

拗ねた口調で言う彼に、ルカは「また貯めればいいわ」と声を掛けようとした。

しかし、林の奥からばたばたと忙しない足音が聞こえてきた。

「ルーカー！バルドー！！」

全速力、といった様子で駆けて来たセナは、ルカと、その腕に抱かれたバルドを見て雪の上に膝をついた。

しばらく、上がった息を整える。整った途端に、凄いい勢いで首を振り上げて、指を組んで叫んだ。

「ごめん！！悪魔の召還に失敗しちゃったんだ！」

ルカは口を開いて目を見開いた。驚きと呆れだ。

バルドは、こめかみを引きつらせた。怒りと呆れだ。

「元凶はお前か！」

「うわーん、ごめんってばー。バルドがいるんだから、今度こそ上手く行くと思っただよっ！」

そう。オカルトファンを自称するセナは昔から何度も何度も悪魔召還を試みてはいた。彼の素質のせいかな、やり方が間違っていたのか、一度たりとも成功した試しはなかったが。

しかし、今回は初めて成功したのだ。二匹の悪魔が現れた時、セナは狂喜乱舞した。だが、悪魔達はセナを一瞥するなりこう言った。「なにい、この魔力の欠片も無い子供。あっちの方にいる娘の方が美味しそうだわあ」そして、ルカたちのいる林を指差したのだ。セ

ナがその台詞の意味を理解した時には、悪魔達の姿は既に無かった。焦ったセナは取るものもとりあえず、林に駆けて来た、そういう訳だった。

「馬鹿者が！ 一步間違えば、ル、ルウが死んでいたのだぞ！」

彼女の腕から身を乗り出して叫ぶ。『ルカ』と再び呼ぶには残存魔力が少なすぎた。

「まあまあ。落ち着いて。バルドのお陰で何もなくて済んだんだからね？」

ルカは彼を抱き直して微笑みかける。

むっ、と口を尖らせるような仕草をして、バルドは黙る。

「えっ、何！？ バルド、大活躍？？ ルカの危機を救っちゃったりした！？」

話に食いつく弟に、ルカは別の話を振る。

「ねえ、セナ。明日から冬休み中はおばあちゃんのところに行かない？」

「へ？ なんで？」

急な話の転換について行けず、セナは目を瞬く。

「ここではバルドの魔力の回復の妨げばかりだわ」

「あつ、そっか。明日はクリスマススのミサがあるし、その後は年末、年始の行事が続くもんね」

「うん。パパたちを手伝えないのは申し訳ないけれど、一回くらいは許してくれると思うわ」

「そうだね。でも、それなら、持って行く魔道書を厳選しないとなあ……」

先ほどの失敗の事など頭から吹き飛ばして、セナは二人に背を向けてぶつぶつと指を折り始めた。持って行く魔道書や道具を脳内で確認しているらしい。

妖しげな台詞を連発する弟の背中から、腕の中のバルドに視線を移して、ルカは小首を傾げた。

「バルドはどう思う？」

彼は、顔を背けて黙っている。

「バルド？」

ルカが再び声を掛けると、顔を向こうに向けたまま、バルドは言った。

「あなたは、そんなに早く私と離れたいのか……？」

あからさまに面白くなさそうにバルドがそう言うものだから、ルカは思わず肩を震わせて笑ってしまった。可愛くて。

「……ふふっ」

「何がおかしい」

ルカは、苛立った声をあげるバルドの両脇を持って、視線の高さに持ち上げた。

「バルド、助けてくれて、本当にありがとう」

そう言って、彼の獣の口に自分の唇をそっと重ねた。

驚いたのか、強張っていたバルドの体から力が抜け、ぶらんと揺れた。

もう一度彼を腕の中に抱き直すと、ルカは家に帰る為に歩き出した。

「大丈夫よ。帰したくなくなったら、私、聖句を唱えるもの」

ぼんやりとしていたバルドは、ルカのその言葉に顔をあげ、微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6589p/>

聖夜のバルド

2011年4月1日00時55分発行